

薄田 斬雲（うすた・ざんうん）

1、プロフィール

小説家、伝記作家。明治末期新聞記者となり、小説・戯曲を自然主義的時流の中で発表。また、記者体験から歴史・伝記への関心を深め、豪傑的人物を描く道へ転換していった。

<生没>

1877(明治 10)年1月 27 日 ~ 1956(昭和 31)年8月5日

<代表作>

伝記『天下之記者(山田一郎君言行録)』

随筆集『片雲集』

伝記『頭山満翁一代記』

<青森との関わり>

弘前町(現弘前市)生まれ。画家野沢如洋、柔道家前田光世の伝記、『希望の弘前』などで郷土愛を示した。

2、作家解説

本名貞敬。明治 10 年1月 28 日、弘前町蔵主町(現弘前市)に、父貞一、母しまの長男として生誕。23 年青森県尋常中学校(現弘前高校)入学(28 年卒業)。32 年東京専門学校(現早稲田大学)文学科選科を卒業。京成日報記者、早稲田大学出版部編集委員となる。

39 年「虚栄の巷」、40 年「平凡な悲劇」、42 年「山上の舞妓」、大正元年「悪党」、2 年「船頭」などの小説の他、戯曲・随筆を自然主義の舞台「新小説」「早稲田文学」をはじめ、「東京二六新聞」「読売新聞」などに発表。しかし文壇の退廃性にあきたらず、国家、社会への関心(玄洋社・黒龍会や社会主義者木下尚江などへの接近)を深め、転換を図る。

39年の『天下之記者(山田一郎君言行録)』随筆集『片雲集』、41年の評論『暗黒の朝鮮』45年の『世界横行武者修行(前田光世通信)』、大正5年の『羅馬史』、7年の翻訳『日本の戦略』(フレデリック・ステーナー原著)などは、転換の方向を物語っている。

こうした方向の延長上に、昭和2年の『半峰昔ばなし(高田早苗自叙伝)』、5年の『豪俠画人野沢如洋』、12年の『頭山満翁一代記』などの伝記作品がある。

戦中の疎開に続く在郷中に、戦後の郷土の復興の指針を示した『希望の弘前』(昭和24年6月)は、郷土の歴史や人生を回顧しながら、ひとびとを激励するところ大であった。

3、資料紹介

○『片雲集』

図書

1906(明治39)年8月25日

185mm×130mm

随想集。坪内逍遙の序。また、自序で「此の書を謹んで満天下のユーモア趣味ある愛読者に呈す」と記す。「無味録」「半可通」等37篇の文章を収める。